

# 農場トレーサビリティで安全な豚をPR ～やまゆりポーク勉強会で～



食品需給センターの関根常務理事が、国産豚肉「農場トレーサビリティ」について講義した

やまゆりポーク生産者協議会は、10月16日に、国産豚肉の「農場トレーサビリティシステム」について会員を対象に研修を行った。会員農家8名の他、県畜産技術センター、県家畜保健所、JAなどから21名が参加した。

(一社)食品需給センター常務理事の関根隆夫氏が講師を務め、「国産豚肉 農場トレーサビリティシステム」の考え方や目的、進め方や効果について説明した。

国産豚肉の「農場トレーサビリティシステム」は、BSE発生を機に導入が進んだ牛肉の生産から

販売までの移動履歴を管理する「個体識別システム」を、豚肉の流通でも取り入れようというもので、養豚農場から食肉処理場で枝肉になるまでの豚の移動履歴を記録する。消費者は、(一社)日本養豚協会の「豚トレ」サイトにアクセスし、精肉売場に設置された「トレーサビリティ実証パネル」に表示された5桁の「農場番号」を入力する事で、「どこの農場で」「どんな特徴を持つ豚が」「どのくらいの量が生産され」「どのように品質・衛生管理がされ」「どこの処理場で枝肉に加工したか」といった生産履歴情報を得る事ができる。枝肉段階までの「農場トレーサビリティシステム」に、「トレーサビリティ実証パネル」の精肉売場設置を組み合わせ、生産から販売までの「チェーントレーサビリティシステム」を構築しているのは、平成26年度集計で全国53農場、うち神奈川県は10農場ある。

やまゆりポーク生産者協議会員では、9農場のうち5農場が平成27年2月からチェーントレーサビリティを導入済みで、現在準備中の農場もあるなど、会をあげて意欲的に取り組んでいる。TPP合意の影響で、今まで以上に輸入農畜産物の増加が懸念される中、協議会では、会員農場ごとに一軒以上の協力小売店を結び付け、生産履歴を開示する事で国産銘柄豚の差別化や価値向上を図りたい考えで、未導入の会員に対してはシステム構築に向け支援し、またJA直売所などに理解協力を求めていく。

関根講師は、「農場トレーサビリティは、銘柄豚『やまゆりポーク』ブランドを消費者に訴求する事と同時に、各農場の経営理念や養豚にかける思いを発信し、生産者の顔が見える事に意味がある。チェーントレーサビリティは、トレーサビリティ実証パネルに表示された豚肉が確実に売場に並ぶ事など、流通、販売段階の理解協力が不可欠。生産、流通、小売、が役割を自覚し、責任を持って表示の正当性を保つことで、消費者の信頼確保につながる」と話した。



売場に設置した「トレーサビリティ実証パネル」で、生産農場から販売店までの経路が見える (JAさがみわいわい市寒川店)